

皆さんに考えてほしいこと

河田 惠昭

2011(平成 23)年東日本大震災では、死者・行方不明者が約 1 万 9 千名にも達しました。その大半は津波の犠牲者です。1995(平成 7)年阪神・淡路大震災では、死者は約 6 千 4 百名でしたが、そのほとんどの犠牲者は、地震の揺れによる住宅の倒壊や火災で亡くなりました。そして、津波災害と地震災害の二つを比較したところ、津波災害による住民らの死亡率は、地震災害の約 10 倍になることがわかりました。津波災害では、逃げることに、すなわち早く避難することが大切なのです。

そして、今度はその一人ひとりの犠牲者がどのようにして亡くなったのかを調べてみると、考えなければならないことが幾つか出てきました。その一つを紹介しましょう。宮城県石巻市の海に面した松原地区で起こったことです。ここでは、地震の揺れは震度 6 弱でした。立っていることができない揺れが 1 分以上続きました。そして、直後に大津波警報が発令され、避難勧告が出ました。そのとき松原地区の区長さんは、一緒に避難するために 96 歳の一人住まいのおばあちゃんの家を訪ねました。後から調べてみると、最初の約 5m の高さの津波がやってくるまでに、この地区では約 30 分の時間があつたのです。でもおばあちゃんは区長さんに、「私はそんなに歩けないから、先に逃げてください」と言いました。おばあちゃんの家から避難所に指定されている渡波小学校まで約 800m あるのです。区長さんは今すぐにでも来るかもしれない津波のことを考えて、一人で避難せざるを得ませんでした。そして、松原地区では、80 歳代の高齢者、70 歳代、60 歳代の順で、多くの犠牲者がでました。でも、道路は避難できないほど壊れていたわけではないことが後からわかりました。

私はこの話を聞いて、高齢になればなるほど長い距離を歩くことはとても難しいのに、「なぜ車いすが用意されていなかったのだろう」と考えました。今回、歩いて避難して助かった人は、平均 438m しか歩いていないこともわかりました。車いすさえあれば、避難することはそれほど難しくないことがわかったからです。足に自信のないおばあちゃんを車いすにのせて、区長さんや近所の人が協力して押して避難所に逃げることは可能でした。でもそれができませんでした。たとえ若者でも、おんぶや抱っこをして長距離を避難することは不可能です。車いすさえあれば助かっていた犠牲者が多くいたことが後からの調査でわかったのです。

東北地方は、明治維新以降、首都圏に多くの人びとを送り出してきました。昭和 30 年代の高度経済成長期以降、多くの若者が大学進学や就職のために、そして冬には出稼ぎの形で農業従事者が首都圏で働く機会が多かったのです。典型的な例を紹介すれば、地元の高等学校を卒業して首都圏の大学に進学し、そのまま首都圏で就職して、結婚するという事例です。そして彼らは、家族を連れて盆や正月に帰省するということを繰り返すのです。帰省時の首都圏の新幹線の混雑や高速道路の渋滞ぶりは、いつもメディアが伝えるトピックスですが、毎年恒例となっています。

東日本大震災の後、私は日本政府が作った復興構想会議に委員の一人として参画しました。そこでは、被災地の復興のためには「絆(きずな)」が大切だと主張しました。この絆が弱体化していることが多くの犠牲者を生み出したと考えたからです。たとえば、もし、子どもたちが故郷に残してきた高齢の親のことを心配して車いすをプレゼントしていたら、助かった人はとても多かったと思います。故郷に残った親は毎年一歳ずつ年を取り、地域は確実に高齢化していきます。このような社会はそのままでは、災害に弱い地域になってしまいます。

地震に対しては住宅の耐震化が、津波に対しては早期の避難がとても大切なことがわかってきました。しかし、それを故郷に残り、年齢を重ね、ますます増える高齢者と自治体だけで実現することは不可能です。故郷から旅立ち、今は成人となった人びとの協力が必要なのです。わたくしはこれを「平成の親孝行」と名付けました。これからの防災・減災の中心は、自助や共助であり、それをどのように具体的に実現できるかは、故郷で育った子どもたちの協力がとても重要だと考えています。

2013(平成 25)年 3 月



河田 惠昭 (かわた よしあき)

関西大学理事・関西大学社会安全研究センター長・教授。京都大学名誉教授。工学博士。専門は防災・減災。現在、阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長(兼務)のほか、京大防災研究所長を歴任。2007 年国連 SASAKAWA 防災賞、09 年防災功労者内閣総理大臣表彰、10 年兵庫県社会賞受賞。東日本大震災復興構想会議委員。現在、日本災害情報学会会長。